

# もつと知りたい

## 武者小路実篤

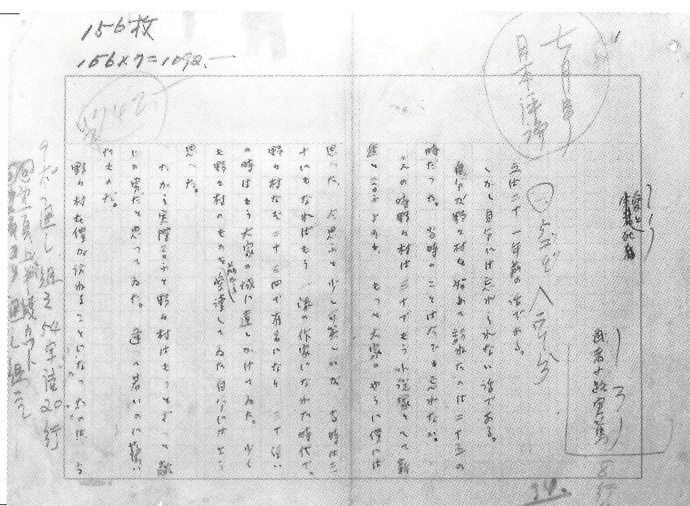
### 小説②「愛と死」

昭和十四年初夏、原稿用紙と万年筆だけを手に、伊豆長岡の旅館に籠った実篤は、人間が互いに注ぎあう清純な“愛”の美しさと、逃れようのない“死”との葛藤を主題にした傑作「愛と死」を書き上げました。今も残る実篤自筆の原稿の、ヒロイン夏子の急死を描いたあたりには、実篤の涙でインクのにじんだ跡を見ることが出来ます。

#### 一 村岡と夏子

「これは二十一年前の話である。しかし自分には忘れられない話である。」

「愛と死」の物語は、このように語り始められます。二十一年前、主人公（語り手）は数え年の二十五歳だったとありますから、今は壮年に達した人物が、若き日の思い出を心によりがえらせているわけです。



「愛と死」原稿（冒頭）  
『日本評論』昭和14年7月号に発表。

しかし、主人公の村岡にとって、それは遠い思い出というにはあまりにも悲痛な体験でした。

新進作家として村岡の先輩格にあたる野々村には、二十歳前の快活で美しい妹夏子がい

て、ある出来事をきっかけに村岡と心を寄せ合うようになります。二人は、お互いに人間として誠実な生き方を認めあい、支えあおうとする若々しい愛情をはぐくんで行きました。

実篤は、この「愛と死」を書く前年（昭和十三年）の初冬、人はどのように生きるべきかを説いた「人生論」という本を出しましたが、その中で、「恋愛」について次のように述べています。

「それは冷静に見れば一時の熱病なのかも知れない。しかしこの位猥褻的な純な熱烈な感情というものは、人間は滅多に味わえるものではない。」

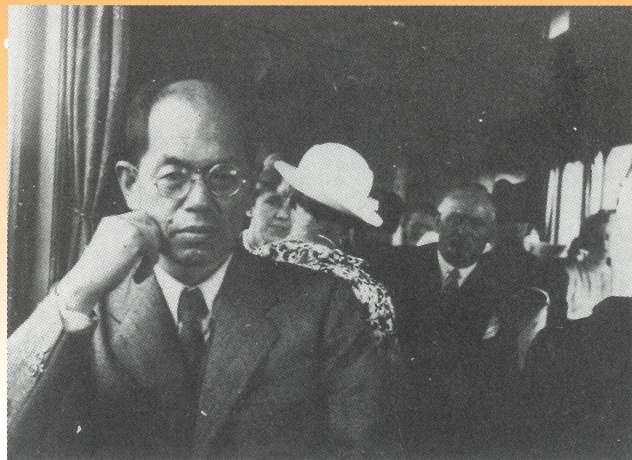


『愛と死』初版本（昭和14年 青年書房）  
装幀は実篤。

たしかに恋愛は自然が人生に送った最も美しい微妙な贈り物の一つである。」  
村岡と夏子の間にはぐくまれた愛は、まさに自然から与えられた贈り物でした。

伊豆長岡より見た富士 昭和5年  
実篤は昭和5年以来、たびたび伊豆長岡を訪れ、この地で多くの原稿や絵を手がけた。





ドイツ・ハンブルグで 昭和11年

実篤は昭和11年4月から12月までヨーロッパとアメリカへ旅行して、各地で美術館を訪ね、ピカソら当時活躍していた芸術家に会った。「愛と死」にはこのときの経験が生かされている。

## 二 物語の急展開

二人はやがて将来の結婚を考えるようになっていきました。そんなとき、村岡にヨーロッパへ勉強に行くチャンスが訪れます。いろいろと考えて、結局将来のために半年ほど行くことにします。当時、ヨーロッパへ行くには船で何日もかかる長旅をするほかなく、今に比べたら随分と遠く感じられました。

遠く離れば離れる程、二人の清らかな愛情は深まります。夏子は自室の壁に村岡が帰るまでの八十余日分の丸を書いた紙を貼り、その丸を一日ごとに消して行くのでした。

ここで、物語は悲劇的な急展開をとげます。

## 三 失われぬ愛

「これは二十一年前の話である。」と言いながら、主人公は今なお夏子を思いやり、そしてこう言います。

「死んだものは生きている者にも大なる力を持ち得るものだが、生きているものは死んだ者に対してあまりに無力なのを残念に思う。」

「…死せるものは生ける者の助けを要するには、あまりに無心で、神の如きものでありすぎると言う信念が、自分にとってせめてもの慰めになるのである。」

それより他仕方がないでは

ないか。」

実篤は、幼い頃に肉親の死を経験したこともあり、人一倍「死」というものについて考え続けた人でした。そうした思索の上に、「生きていること、愛すること」の大切さを訴える彼の心は養われました。この小説も、その精神に支えられているものと言えるでしょう。

「愛と死」は、「友情」と並んで青春小説の傑作とされるものです。実篤は村岡や夏子を単に登場人物として筆先で描いたのではありません。彼等は実篤の心の中に実在し、生きていました。それはこの作品のみずみずしく迫力ある文章に接すれば自ずとわかることでしょう。

この小説を原作として後に★「世界を賭ける恋」(石原裕次郎・浅丘ルリ子主演 昭和三四年 日活)、★「愛と死」(新克利・栗原小巻主演 昭和四六年 松竹)という映画も作られました。



八十二歳  
実篤

万年青 昭和41年